

くるみが丘

A minimalist line drawing of a landscape. It features several rolling hills represented by simple curved lines. Small, stylized trees with circular tops and thin trunks are scattered across the hills and in the valleys. The overall style is clean and modern.

くるみが丘
井伏鱒二

文藝春秋

くるみが丘

昭和四十一年三月二十五日第一刷発行

定価 四五〇円

著者 井伏鱒二

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

印刷 大日本印刷

製本 中島製本

製函 文京紙器

目 次

叱られた二人

7

エブリマンス屋

29

黒い溝

50

竹芝栈橋

71

横浜から東京へ

95

注文取

114

奇数日と偶数日

132

ポスターと案内状

149

胡椒のにおい

167

出張旅行

184

南無三宝

200

リハーサルの日

220

装幀 宮田武彦

くる
みが
丘

叱られた二人

「比石ニュース」という地方紙に、ある高等学校での一つの出来事を伝えていた。「余滴欄」という見出しのもとに「思いあがった先生に叱られた二人」という小見出しをつけ、こんなことが書かれてあった。

『最近、学校の先生の行きすぎが各方面から批判されている折も折、釈岳高校（仮名）の釈岳先生（仮名）は行きすぎの行為があったそう。きな臭いほどの行きすぎであったそう。』

この先生は春の運動会の練習に際して一生徒の云った言葉を暴言と聞き違い、全校生を体育館に入れて体育に関する講話（こうぎ）を与えながら、その一生徒には罰として校庭を四十二回走り廻らせた。田舎の高等学校だから校庭は広い。その生徒が走り疲れて次第に歩速をゆるめる

と、釈岳先生は講話をつづけながらも階段のところに出て

「何だ、その走りかたは、もつと精せいいっばい走れ」

と叱りつけ、また戻つて来て講話をつづけ、また階段のところへ行つて叱りつけた。最後に講話を終った先生は、漸ようやく四十二回走った孤独な走者に、

「きよう習った体操を、はじめからもう一度やりなせ」

と命じ、全校生の見ている前で体操を復習させた。

釈岳先生は釈岳町近郊に於ける勢力家の子息である。その鼻息たるや、いかんともなし難い。但ただし、今度の事の起りは全校生もよく知っている。はじめ釈岳先生は、全校生の体操訓練が

終ると生徒たちに「休め」の号令をかけ、先生ひとり松の本の茂っている小高い土壇に登つて行き、その頂上に立つてスポーツ精神について訓話をした。生徒たちはざわついていた。

後方の列のものには先生の声が聞えない。このとき最後列にいた三年生のある一人が

「先生、聞えません」と大きな声で云った。

「誰だ、いま云ったのは。もう一回、云つてみる」と先生が云った。みんな静かになった。

「賀田加一郎（仮名）です。聞えません」という返答があつた。

すると先生は最後列の別の一人に「おい橋崎（仮名）。さっき俺の云った言葉が聞えたか」

と云った。

「先生、聞えませんでした」と檜崎が答えると、先生は檜崎の隣の生徒に

「おい金村（仮名）、いま俺の云った言葉が聞えたか」と云った。

「はい、聞えました」と金村が答えた。すると先生は土壇の上から駈け降りて来て

「何だ、金村が聞えるのに、お前が聞えん筈はない。前へ出て来い」と賀田加一郎に云った。

先生は不断から生徒をなぐるので賀田は怖くて前に出なかった。先生は賀田のシャツを襟首のところで掴み、横ざまに引きずって行きながら

「全員、体育館に集合。全校生、体育館に集合」と号令をかけた。

すなわち筆者の思うに、ここで先生は生徒に対して正に暴力を加えようとしたことになるだけで、先生が体育館のなかに入った後は暫く賀田加一郎にランニングの猛練習をさせたことになるが、賀田にとっては名誉なことではなかった。しかもこの事件について筆者の詳しく取材したところによると、賀田加一郎の体操練習が一段落つくと、先生は「おい、賀田と檜崎、ちょっと来い、用がある。他の者は解散、全員解散」と全校生を解散させ、賀田と檜崎を宿直室へ連れて行った。

そこには小使や新任の先生がいたが、釈岳先生は「おい小使。緊急、大事な話があるから、

ちよつと諸君は遠慮してほしい」と人ばらいして、

「おい、賀田と檜崎、ここへ坐れ」と云つて板の間にかしこませ、

「お前らは、揃いも揃つて生意氣だぞ。どっちが兄か弟か知らんが、さっき俺の声が聞えても聞えんと檜崎が云つたのは、兄が弟を庇かばつたつもりか。それとも弟が兄を庇かばつたつもりか。しかし俺は、お前らのどっちが兄か弟か知らん。それは知らんが、顔は似ておらんのに生意氣なところは瓜二つだ。出来そこないのところも瓜二つだ。兄弟ともなれば、實際、争われんもんだ」と云つて長嘆息たんそくしてみせた。

賀田加一郎は腑に落ちないような顔をしていたが、檜崎習太は途端に両手を口に当て目に当て、忙しく泣きだした。それを覗き見していた小使は、釈岳先生から「こら、許さんぞ」と一喝あつくらわされた。

小使は一部始終を立ち聞きましたのであつた。先生は賀田と檜崎に、

「お前らは、もう帰れ」と云つて二人を宿直室から出て行かせ、やがて今度は小使を呼んで油をしぼろうとしたが、もうそのときには小使は街へ用たしに飛び出していた。釈岳先生は小型自家用車で小使のあとを追いかけて行つた。

翌日、賀田加一郎と檜崎習太は、退学届も出さないうで東京方面に行つてしまつた。二人は

笠岡駅から汽車に乗る前に駅の近くの喫茶店で待ち合せ、東京行き切符二枚を檜崎が駅へ買いに行つて来ると、二人は郷里への名残りに駅前のパチンコ屋で玉弾きを楽しんで、再び喫茶店でカステラを食べながら密談した後で汽車に乗ったという。

筆者は二人のために同情の涙をそそぎたい。前途多難であることだろう。しかし二人の自重自愛を祈りたい（袋耳生記）』

この記事は仮名を使つてはあるが少し人の私生活に立ち入りすぎている。「余滴欄」と名づけて勝手なことを云うつもりで欄であるにしても、もうちょっと遠慮するように筆加減を考えしてもらいたかった。おそらくこの記事を書いた記者は、釈岳高校の生徒から噂を聞いたので小使から取材して、次に駅前の喫茶店の女給かボーイから取材したものだろう。

笠岡は山陽線沿線の小さな町で、もし新聞記者がその気になれば、家出をした附近の町の高校生の足どりを辿ることぐらい造作ない。釈岳高校の所在する釈岳町は笠岡よりもまだ小さい。善いことをしても悪いことをしても、噂は町じゅうにすぐ伝わってしまう。高校の正門前にある文房具屋の後家さんも、高校生たちの行状や先生がたの無くて七癖を、手にとるように知っている。

「比石ニュース」は発行部数五千部で、講読者の範圍は釈岳町のほか二つの小さな町を加えて殆ど一郡のうちに限られている。「思いあがつた先生に叱られた二人」という記事の出た掲載紙は、賀田加一郎と檜崎習太が家出して五日目に発売されたので、東京に行つてしまつた二人はこの記事のことは一つも知らなかつた。二人は自分たちの行先を誰にも内証にしたので誰も知らせてくれなかつた。だからこの記事では何の痛痒も感じることはなかつたが、宿直室で釈岳先生から聞かされた言葉は、したたか頭へ応えたのであつた。五臟六腑にしみこんだと思つてもいい。ことに事情を知らなかつた加一郎は強い衝撃を受けた。瞬間、舌の先がしびれるのを感じた。胸がごとごと動悸をうちつづけた。

「まるで寝耳に水じゃ」加一郎は宿直室を出て、学校の門を出たところで習太に云つた。

「僕は何も知らなんだ。そうかなあ、しかし、先生の云うたことは本当かなあ」

「そうかなあ、君は。しかし、僕は知つておつた」習太は、親身の氣持を見せているようであつた。「僕は子供のときから知つておつた。ただ、うちのお袋に口どめされておつたから、誰にも秘密にしておいたのや」

「しかし、そうかなあ。僕と君が、ほんと兄弟かなあ。僕は一月十七日生れだが、君は何月生れじゃ」

「僕は三月三十日生れ。うちの母は、僕が子供のときからよう云うておった。本家とのことを、絶対に他人に云うではないぞ。もし他人に云うたら、通り魔が忍び込むぞ。よくそう云うたもんや」

「そうかなあ。そうすると君は、うちの親仁^{おやじ}を知っとるか」

「それが、僕は赤児のときだもんで、はっきりした顔は覚えんよ。しかしな、お父さんが召集されて戦争に行くときの写真、セロハンに包んで、うちの仏壇のなかに隠してあるよ。それから戦争に行くずっと前、お父さんと、うちの母と宮島で一緒にうつした写真、母が箱にしまつて持っておるよ」

「そうか、僕も親仁の顔はよく覚えん。写真帳の写真見て知っておるだけじゃ。うちのお袋は、しかし親仁の写真を仏壇に供えておらん。生活の違いかな。このごろ、うちが貧乏したからな」
「性格の違いやろな。うちの母は、めめしい性格やからな。さっき釈岳先生が云うたことが、もし母にわかったら、どんなにめめめすることかしれん」

しかし釈岳先生がどうしてその秘密を知ったのだらう。先生があれほど確信ありげに云ったところを見ると、もう町の人も村の人も大半は知っているに違いない。加一郎はそれを思うと、もうここで幾ら口をきいても追いつかないと思った。習太も無口になってしまった。

一台の小型自動車が二人を追い越して、すぐ前方のパーマメント屋のところで急停車した。

釈岳先生の自家用車であった。操縦席の先生はドアをあけて二人の方を振向いていたが、加一郎が「あのおっさん。まだ僕らを叱るつもりか」と立ちどまると、自動車はドアがしまつて走り去った。

「執念ぶかいおっさんや」吐きすてるように習太が云った。「しかし、なんぼ執念ぶかくても、僕はもう平気やで。どうせ僕は学校をやめるんや」

「僕もやめる」加一郎は実際それ以外の道はないと思った。「学校をやめて、どこかへ行つて、僕は自給自足の暮らしをする。そうするんじゃ。僕は、それにきめた。そうだ、善は急げじゃ」それは発作的に思ったことでありながら、これが一ばん正當な行きかたであるような氣持がした。

「僕もどこかへ行くよ。母にそう云つて、近所へは家出した恰好で行つてしまふ。そやそや、二人いっしょに行かんか。僕は、明日決行する。決行あるのみや」

習太は、うつむいて歩きながら、しくしく泣きだした。

加一郎の家は釈岳町から北に当つて、三里あまり離れた吉尾村の岡の中腹にある。家には母親と嫁入り前の姉がいる。バス通学しているのだが、停留所は素通りして習太と並んで歩いて